

繰り返しの最後:「再犯防止」の現場から 薬物依存と向き合う／3止 今度は助ける立場に /富山

毎日新聞 2013年12月10日 地方版

薬物依存からの回復を支援する民間施設「富山ダルク」の施設長の林敦也さん（39）によると、富山ダルクに入寮しても、回復プログラムへの参加や社会復帰を断念して途中退寮する人が4割もいるという。たやすくはない回復の道を歩み、現在はスタッフで寮長を務めている鈴木賢二さん（41）の経験を尋ねた。

――薬物に依存するようになったきっかけは

小学1年からのいじめが4年で我慢できなくなり、悪友と関わるようになりました。13歳でアルコールやシンナーを始め、それから19年間、大麻、覚醒剤と次々に依存していきました。薬やアルコールに依存しながら働いていましたが、薬を手に入れるために働き、薬が原因となって仕事でトラブルを起こすなど、全て薬にコントロールされていました。2度刑務所で服役しましたが、受刑者同士で薬物の入手先の情報交換をして「早く出所して薬で遊びたい」とばかり考えていました。

――富山ダルクに入寮してから変化はありましたか

刑務所でのプログラムや弁護士を通じてダルクのことを教えてもらいましたが、当時は薬物からの回復の話いくら聞いても「俺はダルクのメンバーとは違う」と思っていました。暴れて寮内のガラスを割ったこともありますし、1年過ぎたら地元に戻ろうと思っていました。プログラムにある和太鼓演奏も、何のためにやるのか分からず、最初は嫌いでしたが、福祉施設で和太鼓を演奏した後、聴いていたおじいちゃん、おばあちゃんが私の手を取って離さないくらい、泣いて喜んでくれた。「そういうことがうれしいと感じるのだな」と、今では分かるようになりました。

――回復していく中での困難とは何ですか

この施設から工事現場などに働きに行ったこともありました。働くこと自体より「仕事の後の一杯」という当たり前のことに参加できなかった印象が強いです。（薬物などに依存しない生活の）「クリーン」を一日一日と続けていても、やはり社会には「引き金」となる場面がたくさんあります。「本番は社会」と言われても、その点は難しいです。

――今後については

ダルクに来て役割を与えてもらい「やっと生きる場所がある」と思っています。スタッフとして高校生の前で自分の体験を話すこともあります。そうすると、街中で生徒から「覚醒剤のお兄ちゃんだ」と声をかけられることもあるけど、話を覚えていてもらえていることがうれしい。いつか、ダルクがない土地にも同様の施設を開き、自分が助けてもらったように、今度は助ける立場になりたいと思います。＝「薬物依存と向き合う」おわり

この企画は成田有佳が担当しました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ 人物略歴

◇ すずき・けんじ

1972年生まれ、名古屋市出身。2009年4月に富山ダルクに入寮し、10年からスタッフ。12年1月からは、入寮者のプログラムを中心となって進めていく寮長を務める他、庭師をしていた経験を生かし、農作業のプログラムも担当している。